

小田実全集（評論 第31巻）

市民の文^{ロゴス}
思索と発言1

講談社
小田実全集
Makoto Oda

始めに

この本「思索と発言」(「1『市民の文』」^{ロゴス}) (「2『西雷東騒』」)に、私はここ五、六年のあいだに書いて発表した文章を選び、集めた。

(例外はひとつあって、「1」の「基論」のなかの「理解し、許すな」だが、これは一十年前、一九四四年に発表したものだ。また、これはしゃべったのを文章化したもので、あとはすべて書いた文章を集めたこの本ではこれも例外になる)。

二つの事態にかかわつての私の体験が「思索と発言」全体の根にある。ひとつの事態は戦争、もうひとつは震災——そこに凝集して示される自然災害。

戦争は具体的には、一九三二年生まれ、当年とつて七三歳の私が少年時代に体験した「アジア・太平洋戦争」——当時の言い方で言えば「支那事変」とそれにつづいた「大東亜戦争」である。私は両者を実際に、また「思索」的に体験した。私はそのころ小学校の低学年生だったが、子供もまちがいに戦争を考え、「思索」する。

(「アジア・太平洋戦争」はもう少し大きく事態をとらえれば、一九三七年に始まる「支那事変」よりさらに早く一九三一年の「満州事変」から始まる「一五年戦争」だが、私が体験したのは、そう言っ

ていいのは「支那事変」からだ。

「支那事変」は日本から、また私自身からはるかに遠い戦争だった。日本には爆弾一発も投下されなかったし、食糧もふんだんにあった。すべては平時のまま進んでいた。戦争はただ「××陥落」をうたい上げる日の丸の小旗ふつての祝賀行列と、私の場合で言えば、「支那」の前線から帰還した父の知人の召集兵士からもらった青竜刀ひとふりの戦争だった。

私は「支那事変」をその戦争不在のかたちで体験した。これが私の「支那事変」にかかわつての戦争体験だ。実際にも「思索」的にもそうだ。

最初、「大東亜戦争」も、日本から、そして、私からはるかに遠い戦争だった。しかし、当時よく言われた言い方を使って言えば「緒戦」の短かい勝利の一時期のあと、戦争は急速に日本に近づいて来て、私の当時の実感に即して言えば、気がついてみると私は戦争のまつただなかに放り込まれていた。

私がつつただなかに放り込まれた戦争は、食糧の決定的不足、「飢え」と「空襲」だった。「飢え」について言えば、一九四五年八月に戦争が終わつていなくてあと半年ほど戦争がつづいていれば、私はおそらく直接の餓死ではないが栄養失調症の合併症か何かの病気で死んでいた——その措置が妥当な「飢え」だった。それほど食糧は不足していた。政府は食糧の配給切符はくれたが、かんじんの食糧の現物はごく少量しかくれなかった。

空襲体験について言えば、当時私が住んでいた大阪は一九四五年にはほとんど連日アメリカ軍に

よって空襲を受けた。なかで全市焼きつくしの大空襲は八度、そのうち三度、八月一四日午後、敗戦を告げる天皇の「玉音放送」の二〇時間足らずまえの大空襲に至るまで、私は体験した。あれはもう戦争ではなかった。一方的な殺戮と破壊だった。一方的な殺戮と破壊を私は生きのびた。

こうした体験も、実際の体験であるとともに、「思索」的体験だ。当時中学一年生の私も戦争についていやおうなしに考え始めた。実際の体験が私に「思索」を強いた。

それから今日までずっと私は戦争を考えて来た。私の思考、書きものの根にたいていいつも戦争があった。ベトナム戦争で私が一九六五年「ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）」の反戦運動をかたちづくり、自らも参加し活動したのも、一方的な殺戮と破壊の記憶が私に強くあったからだ。そして、今またあらためて戦争について考えるのは、世界各地で、今、戦争が実行されて来ているからだけではない。戦争をよしとする、正義とする、必要なことだとする思考がまたぞろ大きく蔓延し始めているからだ。このまま行けば世界は戦争によって破滅するおそれさえあると、私は今つきつめて考えている。

日本もまた世界のその蔓延の例外ではない。「第九条」とそれを基本とする日本の憲法——「平和憲法」はそうした思考を根本的に拒否する政治原理だが、今それを変えるなり棄てるなりして、日本を戦争のできる国にしようとする動きは今や強い。日本はまだ実際に戦争は始めていないし、参加もしていないが、自衛隊の「海外派兵」が強引に行なわれている今、いつ何どき、日本も戦争を始めるかもしれないし、参加もするかも知れない。

私はあらためて今、戦争を考え、私の「思索と発言」の根にある戦争体験をふり返っている。

「思索と発言」の根にあるもうひとつの体験は震災——自然災害にかかわつての体験だ。

震災は具体的に言えば、一九九五年一月一七日未明の「阪神・淡路大震災」だ。私はその瞬時にして六千余人の生命を奪つた巨大地震に兵庫県西宮で被災し、ここでも私は生きのびた。

人間を殺し、住居であれ道路であれ橋梁であれ高層建築であれ工場であれ、人間のいとなみを根こそぎ破壊することにおいて、空襲と震災は似ている。どちらもが一方的な殺戮と破壊だ。震災の被災体験のなかで、私の戦争体験——空襲体験の記憶はよみがえつて来た。被災の現場で、私は五〇年前に震災の現場で見た光景の再現に何度も出くわしていた。

しかし、よみがえつて来たのは、殺戮、破壊そのものの記憶だけではなかった。殺戮、破壊に対する日本の政治の対応において、戦争と震災はよく似ていた。その酷似を一言でまとめれば、「棄民」だった。「阪神・淡路大震災」の被災者に対して、政治は「自助努力」による復興をしきりにうたい上げたが、復興に必要な資金の援助は市民が拠出した「義援金」に頼るだけで、アメリカ合州国を始めとして他の「先進国」ならどの国もやっていた公的援助は一切しなかったし、しようもしなかった。

私は戦争中の事態を思い出していた。日本政府は空襲にそなえて防空壕を掘れと言つたが、そのために必要な資材はシヨベルもスコップも、釘も板も何ひとつ供与しなかった。私の一家では兄が庭に穴を掘り、私がトタン板を街のどこかで拾つて来て穴にのせ、そこに土をかぶせた。このお粗末きわ

まる防空壕で私は空襲を体験し、生きのびた。後年、ドイツで暮らすようになった私は、各地で、「ブ
ンカー」と称する鉄筋コンクリート製の巨大、頑丈な防空壕ならぬ防空建物に出会った。「ナチ・ド
イツ」政府はユダヤ人や「反ナチ」のよからぬドイツ人を殺したあと、その強固な（いかに強固であ
るかは、今それらの大建物が「核シェルター」として使われていることで判る）建物をつくり、「善良」
な市民をそこにに入れて、彼らを空襲から護った。日本政府は、「善良」であろうとなかろうと、市民
を一切護ろうとしなかった。神戸に生まれ育った私のドイツ人の知人の口ぐせは、「ナチはドイツ人
にアメとムチをあたえたが、日本人はムチだけもらった」だ。

こうした日本の政治に対して、「阪神・淡路大震災」のあと、私が何を考え、書き、発言し、実際
にどう動いたかは、「1」の『市民の文』^{ロゴス}の「生存の条件」のなかで「震災から日本のあり方を考える」
に収めた発言を始めとして、この本が随所で明らかにしている。日本の政治はいつも——ということ
ばを使っていいほどいつも、「生存の条件」を欠いた政治を市民に強いる。ことに震災や戦争のよう
な非常事態、緊急事態においてそうだ。それが、震災、戦争という二つの体験が共通して私にあざと
く示した事実だ。

ただ、震災と戦争のあいだには大きなちがいがあつて戦争はしないことができ
る。やめる、やめさせることができる——その一事において、二つは根本的にちがっている。

私は震災体験を経て、よりいつそう強固に反戦の志^{こころざし}をもつに至っている。戦争をするな、やめよ、

やめさせよ——と私に私の震災体験、戦争体験の双方が私に強力にまた頑固に告げる。

この本は、「1『市民の文』^{ロゴス}」と「2『西雷東騷』」に分けた。「1」はより原理的な文章、「2」はより時事的に、そのときどきの現実の事態に即して書いた文章をそれぞれに収めた。

「思索と発言」のもととなるのはことば、そして、ことばがかたちづくる「文」だが、ここでギリシア語を使つて『市民の文』^{ロゴス}と「1」の題名にしているのは、「ロゴス (λογος)」には「理性」という意味があるが、もともとはこれは「しゃべる」を意味する「レゲイン (λεγειν)」からできたことばであるからだ。

その昔、古代アテナイでソクラテスはアゴラ（市場）へ出かけて、靴屋としゃべつて彼の哲学を形成した。しかし、靴屋も世の多くの哲学者のようにひとりよがりのくだらぬ世迷いごとを口にしていたのではない。人びとみんなに判る、納得できることばでしゃべつていて、だから「文」^{ロゴス}は「理性」だ。自分の「思索と発言」が日本のアゴラの靴屋の現実に基づき、そこから切れていないことを私はいつもねがつている。

それでは「市民」とは何か、誰か。この当然の問いには、私は「2」の『西雷東騷』のなかで直接答えているが、それより「思索と発言」が全体で答を出しているにちがいない。

戦争をよしとする、正義とする、必要なことだとする思考は、ひとところ日本を覆いつくした戦争文化、戦争文明をまたぞろたやすく形成する。平和を基本とする文化、文明——それこそが真にその名に値する文化、文明だが、それをかたちづくり、維持するのは、世界のどの国の誰のことであれ、市

民ひとりひとりの「文」^{ロゴス}——「市民の文」^{ロゴス}だ。日本をふくめて世界に今また出て来た戦争文化、戦争文明の「武」の刀の狂暴に対して、市民ひとりひとりの「市民の文」^{ロゴス}の静謐が求められて来ている。市民が自らの「文」^{ロゴス}をよりどころとして思索し、発言し、動くとき、逆に不動の決意を込めて動かないとき、世界の平和は維持され、平和を何より土台にした文化、文明も擁護され得る。これはことに日本にかかわって書いておきたい。

では、読んでくれたまえ。「1」「2」、どちらを読んで下さってもよいが、できれば「1」「2」ともに読まれればと思う。私が考えて来たこと、書いて来たことがあなたご自身の「市民の文」^{ロゴス}形成に少しでも役に立つことを期待する。

目次

はじめに

3

基論 歴史の分岐点に立つて…………… 17

理解し、許すな…………… 20

日本の市民として考える…………… 42

I 生存の条件…………… 45

1 震災から日本のあり方を考える…………… 47

「災害大国」の国づくりを…………… 47

「新潟中越」を「阪神・淡路」地震被災者として考える…………… 50

「公的援助」について…………… 53

知事の決断…………… 66

市民の「たたかい」としての「まちづくり計画」…………… 68

「人間の国」の「市民の都市構想」——試案メモ…………… 71

2 戦争と憲法…………… 95

憲法は「今でも旬」か、「今こそ旬」か…………… 95

日本は「良心的軍事拒否国家」をめざせ…………… 111

巻き返しのよりどころとなる敗戦体験…………… 122

「する」側と「される」側…………… 126

「無意味な死」を問いつづける…………… 128

「オキナワ」とつながるもの…………… 130

3 今、この世界で…………… 133

世界のこの先に何があるか…………… 133

問題を根もとから考える…………… 136

戦争阻止へ独自外交を…………… 139

無数のルメイの存在…………… 142

自衛隊の何を報道するのか…………… 144

4 アメリカ・朝鮮・日本……………152

髪の色のことから……………152

二つの顔をもつ国アメリカ……………161

なんもかもわやですわ、アメリカはん……………164

アメリカと今いかにつきあうか……………166

私の「朝鮮」との長く、重いつきあい……………176

II 基盤としての文^{ロゴス}……………191

「文」^{ロゴス}の「アンガジュマン」……………193

南京虐殺（ロシエンバーグ）……………252

「フーブン」の詩人の重い答……………256

この覇道の世界で……………269

終りに……………314

初出一覧

市民の文^{ロゴス}

思索と発言1

基論 歴史の分岐点に立って

世界は日本をふくめて、今どこへどう動いて行くのか、判らないところに来ている。とんでもない方向に動いて行くのか判らない。これは世界の多くの人が、私自身をふくめて危惧していることだが、その意味で、世界は今、歴史の分岐点に立っていると見える。こうしたとき、世界のどの国の誰にとつても必要なことは、自分が、また自分の国が、世界のどこにどのようなようにしているのか、歴史の流れのどこにどのようなようにかわり合つて位置しているのか、その自分と自分の国の位置、ありようを見さだめることだと私は考えている。

「理解し、許すな」は、日本にかかわつての私なりのその見さだめの作業だ。

もともとは一九九二年から九四年にかけてニューヨーク州立大学（ストーニー・ブルック校）で教えたときに学生たちに話したことを、帰国後インタビューを受けて手みじかにまとめ上げてしゃべつたのを文章化したものだが、私はそこで日本の過去をどう見るか、そこから日本の未来をどうかたちづくるかを論じていた。過去をどう見るか——ひと言で言えば、「理解し、許すな」。私はそう論じた。

しかし、そのあと七年が経つて、二〇〇一年九月には、今や全世界で「九・一一」と呼ばれる事件がニューヨークで起こつた。「日本の市民として考える」は、そのあとの世界での私の私自身と私の国日本の位置の見さだめの作業だ。

「理解し、許すな」とそのあとにつづく「日本の市民として考える」は、二つともにこの本の私の「思索と発言」の土台となる「基論」としてある。

「日本の市民として考える」に少し書き加えておきたい。

私がこの文章を書いたのは、日本時間の九月一日夜のことだ。私が兵庫県西宮の居宅の居間でテレビにスイッチを入れたら、画面にやにわにニューヨークで見慣れていた世界貿易センターのツイン双子の建物二つが出て来て、飛行機がそのひとつに突っ込んで行くのが見えた。とっさに私は「特攻攻撃だ」と直感した。画面にその画面を東京のスタジオで見ている人たちの姿が出て来て、「あれは何んだ」と騒ぎ合っていたが、さすがに私は戦争中の子供だ、すぐさま特攻攻撃だと直感していた。

そのとき新聞社から電話がかかって来て、この事件について何か書いてくれと頼まれた。

そのあと朝がたまでかかって徹夜で書いたのが、この「日本の市民として考える」だ。翌朝の新聞には、私以外に二人の文章が出ていたが、二人の意見は、まとめて言ってみれば、要するに、アメリカの立場に立つて民主主義と自由を擁護するものだった。

そのあと新聞やらテレビやらで見たり聞いたりしたいろんな人の感想も同じたぐいのものだった。そのうちイスラム側、「第三世界」側に立つて先進国側、アメリカ⇨西洋側の横暴をやっつける論調のものも辺見庸氏をはじめとして少し出始めたが、そうしたものはたいして出たのではなかった。そして、私のように「日本の市民として考える」ものはなかった。その立論のものはたぶん私の論以外に今に至るまで出ていない。

理解し、許すな

一九九二年から一九九四年まで二年間アメリカに住み、明治以来の日本、朝鮮、中国の絡み合いを題材にした長編小説『河』を書き始めながら(注)、ニューヨーク州立大学で私流の「日本学」を講じた。この講義の内容に触れる前に、アメリカの大学のことについて少し述べよう。アメリカの有名な大学(ハーバード、プリンストン、スタンフォード等)はだいたい私立大学である。私立大学の特色は、お金が潤沢にあることだ。これはいい。しかし、授業料は高い。ふつうの学部で二五〇万円から三〇〇万円もする。ビル・ゲイツは知らずふつうのアメリカ人の給与水準は日本より低いのに、月謝は日本の私立大学より高い。アフーマティブ・アクション(差別制限措置)によって、貧乏な黒人を入学させたりするが、アジア人にもふつうの白人にもこの措置はない。いきおいそういう大学に入るのは、資力のある家の子弟や奨学資金をとれるくらいの優秀な人、極端に言えば金持ちのお嬢さん、坊ちゃん、天才秀才に限られて来る。そうすると、余り面白くない。あちこち講演に行っただけでも、面白くないという感じが強かった。

これに対して、州立大学は公教育的なものとしてつくられ、授業料が安いことに特色がある。ニューヨーク州立大学の例で言うと、年間三〇万円から六〇万円程度なので、ふつうの人が入れる。このことは、たいへんに大事だ。資力のない人、それから先輩の人、つまり家庭にいたり職についていたりしたあと、一念発起して勉強したくなる人が入れる。これでいわばアメリカ社会の縮図がでさがる。

アメリカ社会のひとついいところは、色々な国、民族の人が入って来て住んでいることだ。この点は、日本とはもちろん違うし、ヨーロッパとも違う。わんさといろんな人がいて、そこから一つの活力を生み出すところが、アメリカのえらいところだ。こういう世界の縮図みたいなものがアメリカにあり、なかでもいちばん人種や民族が雑多になっているのがニューヨークで、それを反映しているのがニューヨーク州立大学である。

そういう状態を反映して来るから、私の教室はまさに世界の縮図だった。白人にも、アメリカの白人と東ヨーロッパから亡命して来たような人たち、この間までモスクワにいたとかベラルーシにいたというような人も、ポーランド人もいた。黒人も、アフリカとカリブ海から来た人たち。プエルトリコ。中国、これも本土や台湾、香港から来たのと中国系アメリカ人。韓国も二つある。韓国から来たのと韓国系アメリカ人。フィリピン人、それから日本人。こういう学生を教えるのは面白かった。もともと「日本学」などという講座はないが、イントロダクション・トウ・ジャパニーズ・スタディーズ、「日本学入門」とでもいうべきものをつくった。すると、日本研究が本来の目的ではない、コンピュータをやっている、あるいは生物や経済をやっている学生が来る。日本語は誰もできない。

教材には、文学作品の英訳を用いた。たとえば、戦争については、大岡昇平の『野火』や『俘虜記』、林京子のもの、それに私の『HIROSHIMA』を使った。それから、谷崎の『細雪』、『猫と庄造と二人のおんな』。これらは日本の中流の暮らしの原型であり、今の社会の状況を見るのに一番いいと思ったからだ。

「明治」（私は引用符付きで使う）は、現在の日本の原型をつくったという意味でとくに大事だと思う。それで、最初の学期は、中江兆民の『三酔人経綸問答』、長塚節の『土』、有島武郎の『或る女』（大正時代の作品だが、「明治」のことを書いている）の三冊を「明治」を代表させるものとして教えた。「明治革命」（「明治維新」という呼び方を私はしない）を教えるために先の『三酔人経綸問答』、『夜明け前』、『破戒』を使つた。もつとも、別にテキストに依拠するわけではなく、自分勝手にしゃべるといふのが私の流儀だ。

たしかに、色々な意味で現代日本の原型をつくつたのは「明治」だった。その意味で非常に大事だから、「明治」から今日までを教えることにしたが、そうすると必然的にわれわれの過去、「明治」以前の歴史を教えることになる。そのなかで、日本がなぜこういう道をたどつたのか、ということをきちんと教えることが大切だ。日本の侵略、支配の歴史が出て来るのはもちろんである。いいことはいい、悪いことは悪いと、とにかく全体をきちんと教えるのが私のやり方だ。そのときに彼らに言ったことを突きつめると、「理解し、許すな」の一語に尽きる。これは私の歴史に対する根本的な考え方だ。どの国、どの社会の歴史について理解することはまず必要だと思ふ。こういう筋道でこうなつた、こういう可能性があつたのをこういうふうに潰したとか、可能性がなかつたとか、色々なことが言えると思うが、これをきちんと教える。その上で、それらを許していいのかいけないのかの判断を問う。それは私自身の倫理、論理、自由に関する最大の問題でもあるが、そういうことを教えようと思つた。だから「理解し、許すな」。

今の第三世界が共通にもっている矛盾と同様、「明治」日本の問題は、西洋に取り巻かれていたことだ。私にとつて、いま焦眉の急はこの問題である。『でもくらていあ』という本で、いまの世界情勢と、日本がどういうふうに生きていいかということとを二年半かかって書いた。アメリカで教えている間にも、それを書いていた。この本は一九九六年九月に出版されたが（筑摩書房）、日本の過去についてそれがなぜこうなつたかということとを教えながら、日本の近代の歴史の総体を書いた。日本の近代が直面した問題は西洋との対決だから、その本のなかで「西洋に対して来た歴史」という一章を設け、五〇〇年前のロンブスの「アメリカ発見」に始まつた、西洋諸国の侵略と支配に、日本がどう対してきたかを論じた。これは避けて通れない問題である。

西洋がかたちづくってきた色々な文明の要素のなかで、民主主義がつくり出された。しかし、民主主義は軍事支配や強大な軍事力を背景にした帝国主義とくっついていた。古代アテナイの民主主義がまさにそうである。アテナイがわれわれももっていないような直接民主主義を徹底してやったことはすばらしいことだが、しかしそれは必ず対外侵略と結びついていた。対外侵略に乗っかって民主主義がつくられた、という事実は抜きにできない。長年、このことが気がかりで、私は昔ソクラテスの裁判について書き下して小説を書いた（『大地と星輝く天の子』講談社、一九六三年）。また最近では、古代アテナイに侵略された側からみたら古代アテナイはどう見えるかという小説を雑誌『ちくま』（筑摩書房）に連載したあと出版した（『XYZ』講談社、一九九七年）。古代アテナイはいくらでも侵略、虐殺をしている。有名なのがメロスの虐殺である。そこから出て来たヴィーナスで有名なミロは、元来

はメロスのことである。メロス、スパルタとアテナイが戦争したときに中立を守ろうとしたが、中立を許さないアテナイが侵略して、成年男子を全部殺し、女子供をみな奴隷にした。これは有名な史実で、ソクラテスもメロスを訪れている。また、『トロイアの女』を書いたエウリピデスが衝撃を受けて、『トロイアの女』の土台にしたのはメロスの虐殺であった。ともかく、アテナイの侵略は凄かった。日本が朝鮮を支配したときに、皇国臣民の誓いみたいなのを言わせたが、アテナイ人は被侵略民にあれと全く同じようなことを言わせている。支配と虐殺の上にアテナイ民主主義が乗っかったことは、否定できない。アテナイは、ペロポネソス戦争を除いても、二年か三年に一度ぐらいは戦争をしている。それは、アメリカが戦後百何十回ぐらい軍事介入してきた姿を髣髴させる。私がそういう小説を書いていると言ったら、アメリカ人がアメリカの歴史を書いているのかと言った。そういう歴史が、ずっと続いてきた。このアテナイの歴史を世界的規模に拡大したのが、コロンブス以来の西洋の五〇〇年間の歴史である。西洋は、民主主義と軍事侵略と帝国主義、それにキリスト教というありがたいものをくつつけて、五〇〇年の歴史のなかで侵略を続けてきたのではないか。「明治」日本が直面したのも、この帝国主義の軍事介入の歴史の流れだった。このことは、アメリカ海軍の軍事介入報告に、ペリーがやってきて日本を外圧によって開国させたことが記録されている、ということ一事からも明らかである。ニカラグアのような中米小国と並んで琉球、江戸政府が出て来る。日本だけポコッと出て来る。それは、同じコンテクストの中にあつたということだ。

その外圧によって「明治革命」となるわけだが、外圧で開国して、近代国家を形成することを始めた途端に、日本は、自分たちと同じように鎖国政策をとっていた朝鮮半島に向かって圧力を向け、彼

らを開国させ不平等条約を結んで、朝鮮支配の第一歩をつくって行つた。この過程全体を見る必要があると思う。明治日本の人たちが西洋の民主主義・フランス帝国主義に直面したことは事実としてあつたし、同じ道を追求するか、これに対決するか両方の可能性をもつていたと思われる。そのとき、西洋諸国の力は衰えていて、それほどあからさまではなかつたとはいへ、すごい力で抑えつける。それに對抗、対決して行くという、「非西洋」の歴史の選択があつたことは否定できない。これを徹底すれば、湾岸戦争にまでいたる。湾岸戦争のとき、ブッシュはサダム・フセインをヒトラーになぞらえたが、私は「フセインのイラクはいちばん日本に似てるじゃないか」とあちこちで論じた。サダム・フセインのほうは、自分たちの正義、西洋に抑えられてきたアラブの大義を持ち出して「聖戦」と称し、クウェートをやつつけ支配して、西洋と対決する。日本人は、湾岸戦争をそういう大きな構図で見たほうがよかつたと思う。ブッシュのようにヒトラーになぞらえたら、西洋世界のなかの争いになつてしまう。そうではなくて、第三世界対先進国の戦いという面、つまり西洋対非西洋の面というのが大きかつた。だから、フセインの方はあれだけ「聖戦」を主張し、片方は「自由・平等」と言いながら混乱したのではないか。アメリカが、パナマのノリエガの背後にいて反民主主義の弾圧政策を行つた末、突然ノリエガをやつつけると、ノリエガの方は民族主義と虐げられた国の正義をふりかざして対抗する。ハイチでも、同様のことが起きている。そういう歴史は、いまでも続いていると思う。このことを踏まえた上で、日本の歴史を理解したほうがいい。

「理解し」の次に「許すな」と言うのは、ペリーによって開かれた国がすぐ朝鮮に向かつて侵略と支

配の第一歩を踏み出したことなどについてである。古代アテナイやパナマも含めた大きな視野のなかで、日本の歴史の総体を話して、その上で、なぜこうなったのか、なぜこういうふうになって行ったか、しかし、こんなことを許していいのか、と私は大学で私の「日本学」を教えた。こうすることではじめて、私の「日本学」をよく理解して貰えたと思う。私の講義に感激した韓国人の学生から、ニューヨークの韓国人若者の大きな会に招かれた。アメリカで韓国人として生きているわけだから、彼らは西洋を本を通してではなく日常生活のなかで否応なしに知っている。アメリカという国がいかに素晴らしく、同時にいかにまやかしか、自由と民主主義をふりかざして、いかに無茶苦茶やっているかは、抽象的理屈でなく、彼らが日頃感じていることだからだ。しかし同時に、今度は日本が西欧のやり方を口実にして朝鮮を侵略したり、中国侵略を行つた過程について私が述べると、全体像がようやくつかめた。韓国人たちも中国人たちも、そういうかたちで日本のことを聞いたこともなく、日本がいかにこうなつていったかという過程についても、教えられたことはなかった。ただひたすら日本が悪く、気が狂つたようなのが初めから日本にいて、それでボカンとやつたと思つている。そんなことではなく、それぞれの理屈があつてこうなつていったあげくに、君たちをやつつけたんだ、それを理解する。しかし、それを許してはいけないんだ、と私は教えた。このように、全体像で理解することが非常に大事だ。そうでないと、本当に理解したことにならず、本当に許さないということにならないと思う。理解の上で「許さない」。これが大事だ。私自身が過去の日本の歴史にこうした態度で対している。

全体像がつかめていないことは、日本人の問題でもある。私は、帰国直後「朝まで生テレビ」(テレビ朝日)に引つ張りだされた。今回は、いつものような喧嘩番組でなく、若者を集めてその意見を聞く会にする、というから引き受けた。誰が右か左かわからない世の中だが、左的な人と右的な人が百人ぐらい集った。いちばん右的な発言をしたのは一水会と称する人たちだが、その人たちでも「あの戦争はよくなかった」という認識をもっている。「侵略戦争であった」という程度のことは若者の常識ではないだろうか。手を挙げさせたら、六割から七割はだいたいそう思っている。しかし、それでよかったのかという問題になると、「歴史の必然であったから仕方がなかった」という論理で片づけてしまう。しかし、そこからの展開が必要だ。

大東亜を解放したとか、共栄圏をつくったということを評価する議論があるが、これには一つ大きな弱点がある。それは、朝鮮、台湾を侵略、植民地支配したことだ。大東亜共栄圏がアジアの解放であったと言いながら、なぜ植民地支配をしたか、それを最後まで解放しなかったかということに突き当たった場合に、大東亜共栄圏の理論は全部崩れる。橋本発言(龍太郎)も含めて、もう一つよく言われるのは、侵略的行為だったことは認めるが、そう思ってたのではなく、違う意図でやったのだという議論である。そういうつもりはなかったけれども、結果としてこうなったという言い方、これは若者にもある。さらにもう一つは、他の国もやっておつたじゃないか、という言い方である。しかし、侵略された側からの議論が全然入っていないから、これでは理屈がおらない。善意からであろうと悪意からであろうと、侵略された側からすれば、ぶん殴られたことは同じだ。そういう「お家の事情」を必ず

言うが、そのお家の事情を許していいのかどうかは、こつちの内在的倫理の問題である。お家の事情を言い立て、たとえば「私はむしゃくしゃしたからぶん殴った。だからいいだろう。」とは言えない。人が泥棒したから自分もしていいのか。人が殺したから自分も殺していいのか。そういうことを、きちんと考えなくてはいけない。

この頃集会で話すと、必ず一人か二人言い方はさまざまだが、「他の国は謝っていないのになぜ日本だけ謝らなくちやいかんのか」と言ってくる。一つには、彼らの側に事実誤認がある。他の国で謝った場合もあるのだから、これはまちがっている、しかし根本的には、他の国が謝らなくても自分は謝ればいいじゃないか。これは自分の内在的倫理の問題だと考えるべきことだ。聞いていると全部を外部のせいにして、内在的な話がない。内在的な話になったときに、初めて「許すな」という態度が出て来る。もう一つは、彼らは歴史を総体的に理解していないと思う。大東亜共栄圏を言い立てるのも結構だが、大東亜共栄圏の前提に朝鮮侵略などがあるではないか。その、論理的な矛盾、倫理的な矛盾についての理解が不足している。また、反論する側にも問題がある。大東亜共栄圏をふりまわすべからしい理想じゃないかという勢力に、朝鮮侵略をやったではないか、傀儡かいらいの満州帝国をつくっておるじゃないかということ十分に言っていない。事実をきちんと理解して、総体として言う必要があると思う。その上で「許すな」という態度が出て来る。歴史の総体を、論理的、倫理的なものとして理解する必要がある。西洋がみなやったというのは、そのとおりである。だから、どういう過程でみなそうなっていたのか、という話を全部した上で、論理、倫理の問題として考える。他の人がどうこうというのではなく、自らの内在的倫理の問題として考えることが必要だ。そのことへの理解が

不足している。

「大東亜戦争」を境にそれ以前は侵略だが、それ以後は正当だった、という人がいる。大東亜共栄圏という大義を立てた瞬間に、日本はいいことをしたみたいなこと言うけれど、一五年戦争の前のほうを消してしまっているから、この議論はインチキである。このような議論に対しては、それでは大東亜共栄圏が達成されていたら理想的になっていたのか、と問うべきだ。日本が負けたからアジア諸国の解放につながったのであって、その逆ではない。これは、論理的にはつきりしている。

にもかかわらず、橋本発言のようなものがいまだに続いているのは、日本人に本当の誇りというものがなかったためではないか。悪いことは悪い、いいことはいい、ということをしきりとやるのが誇りだと私は考えている。まず「日本人というのは……」という話があつて、産業が盛んになると日本は偉いという話になる。戦後、私は生業なりわいとしてずっと予備校の教師をしてきたが、若者を教えていてその気持ちの変化がよく判った。東京オリンピック以前には、日本は駄目だと言っていたが、これを境にやつと誇りをもった。しかし経済復興が終わって大国になつたいま、再び若者たちは日本という国がどこか駄目だと思つていてのではないか。そして自信がなくて卑下して暮らしているから、自分の悪を認めようとしないうし、自分より下に見える者をバカにする。

私はかつて『何でも見てやろう』（河出書房新社、一九六一年。現在、講談社文庫所収）という旅行記で、そんなバカなことがあるか、日本には日本でいいところがあるのだ、と書いた。過去にいいところと悪いところがあるのはどこの国も同じだ、日本の善は善、悪は悪ときちんと認める、ということを書いた。それをしないから、日本というものがどこかで駄目で、欠陥品で、というコンプ

レックスになつて、自分の悪いところを隠すとかごまかすとか、というふうになつてゐるのではないか。人それぞれ、いいところ悪いところがあり、自分の悪いところは正していけばいいんだから、悪いところは認めようという態度、これは人間としていちばん基本的なあり方だと思ふ。そのことを書いて、私の本は大変売れた。『日本人よ、誇りをもて』という本が初めて出た、これで日本人も胸を張つていける』とかいう書評がわんざと出たことから、いかにそのころ、日ごろ日本人が自ら卑下して暮らしていたかが、よく判つた。

歴史は、過去をいかに克服するかということにおいて形成されると思ふ。私の「日本学」では、このような歴史的財産を、「アセット」ということばを使って教えた。人間も国もそれぞれのもつ「アセット」を大事にしようじゃないかと。

アメリカの「アセット」は、異なる価値の共生である。ヨーロッパとは比べものにならないほど、アメリカはこれを徹底的にやつていて、つくづくアメリカは偉い国だと感嘆する。といつて、アメリカに差別がなくなつたなどと言うつもりはない。差別そのものは、すごくある。しかし、差別に最も敏感なのもアメリカで、最も鈍感なのが日本である。ヨーロッパはその中間だ。いろいろな差別があることを前提にしても、これはアメリカのプラスの「アセット」だ。アメリカのマイナスは、勝手にやつて来て原住民を虐殺したり、奴隷を連れてきたり、黒人、アジア人などをえんえんと差別したりしたことである。しかし、その上で、今度はいけなめという人々が立ち上がつて、公民権運動などを展開して、これらをプラスに転化しつつある。このことが、重要である。

ヨーロッパの「アセット」といえば、社会保障制度など、一種の公的豊かさを形成したことだ。公的豊かさ、あるいは社会主義的政策あるいは社民的政策を含めた、広義の社会主義を創ったのは西欧だろう。東欧にしても、社会保障国家だったのは事実で、それをともかくこの世に現出させたのがヨーロッパの「アセット」である。マイナスの方も、労働者からの過酷な収奪、植民地支配など、わんさかある。その上に築いた富の上に、公的豊かさのモデルを人類に打ち出したのがヨーロッパではないか。

第三世界は、自分のことは自分で決める自決の権利を獲得して、植民地支配から脱出する過程で、プラスの「アセット」を築いた。マイナスは、彼らが長い間支配され、抑圧されてきたことだ。

ひるがえって、日本の「アセット」は何か。それは、平和主義だ。これも、大きなマイナスの「アセット」の上に獲得したものだ。侵略、植民地支配、虐殺と、「殺し焼き奪う」ことをまずやって、逆に自分たちも「殺され焼かれ奪われる」を体験した。アウシュビッツをやった後、ベルリンの市街戦を体験したドイツも同様である。だから、日本人とドイツ人が最も平和主義をもっていて、これを大切にする。以上四つの「アセット」が、いまきわめて重要だ。

いつべん大きな視野のなかで物を考え、そのなかで今度はどうするかを問う、というぐあいには私の「日本学」の学生を教えた。過去ばかりを見ても駄目で、将来どうすべきかを考える。日本だけでなく、どの国もマイナスの「アセット」を背負っている。しかし、それを正すのは基本的にはその国の人なのだ。たとえば、朝鮮半島を見ても、いろいろと理不尽なことが沢山あったし、いまでもあるが、それを正すのは朝鮮人自身がやることだ。だから、日本人自身がやるべきことは、他国がどう

であれ、自分たちのマイナスを克服して得た平和主義というプラスの「アセット」を、きちんと育てていくことだと思う。これは、人類に対する日本人の責務だ。こういうふうに教えたら、私の学生たちはわかってくれた。日本の子供たちにも、このように教えたらいい。それには、もつと大きな史観に立った、根本的な教科書が必要だ。ロンブスから五百年目ということを進歩派が問題にしたことがあったが、この年が豊臣秀吉の朝鮮侵略から四百年目だったことは、誰も問題にしなかった。奇しくもこの年は、二つの侵略の歴史の節目だったのだ。これくらいの大きな視野を展開して教科書を書き直せば、子供たちも納得すると思う。

私の「人生の同行者」(つれあいのことを私はそう呼ぶ)は在日「コリアン」だが(在日「朝鮮人」だとか、在日「韓国人」だとかの別を超えてしゃべりたいので、私はここでこういう言い方をする)、彼女がいみじくも言った。なかなか名言だと思っても覚えているが、それは次のようなことだ。アメリカは、日本に対していい顔を見せている。民主主義と軍事帝国主義をあわせもつた西洋民主主義のうち、日本には民主主義のみを与えてくれた。しかし、韓国に対しては、もう一つの帝国主義の顔に向けて、李承晩の実質上の独裁政権を支持した。そこで、韓国人は民主主義を奪いとられた。韓国の民主主義はそのあと韓国人自身が闘いつつた。日本と韓国の民主主義の、この違いを考えたらどうかと。このことに関連して思い出すのは、沖縄の祖国復帰闘争のことである。この闘争は、民族解放闘争と民主主義回復闘争の二面をもっていた。このことの理解が大事だ。アメリカが押しつけてきた占領と民主主義をくつつけたもの、そんなものはいらないといって自分たちの民主主義を闘い取つ

た。この点で、韓国に最もよく似ているのが沖縄である。

そして、日本の民主主義をつくりだした基本に、平和主義があるということ、このことが非常に大事だ。あの戦争の結果われわれは、はからずも民主主義を獲得した。いみじくも、中江兆民は『三酔人経綸問答』のなかで、洋学紳士に「本当の民主主義を推進しようとしたら、非武装でないとできない」と言わせている。当時としては、画期的な意見である。兆民はそれだけを推進しようとしたわけではないが、洋学紳士の唱える自由民権闘争のいきつくところが非武装の民主主義であることを看破し、道義の力で世界に存在する道を指し示した意味は大きい。これを東洋豪傑というのが、そんなこと言ったら侵略されてしまうぞと批判し、南海先生が中間的で緩かな政策を唱えて、二人から嗤われる。だが、これら三人ともが兆民だったと思う。互いに、極めて矛盾している。西洋が民主主義、ラス帝国主義という矛盾したものを押しつけてきたから、こっちも矛盾せざるをえない、というところがある。しかし、洋学紳士の口を借りて兆民が説いた平和主義の理想、それこそが日本の民主主義の根本にあるものだ。

実際、戦後の日本国憲法はまさにそうしたものとして存在した。初め借り物の与えられた民主主義を、違った自まえのものにしたのが日本の平和主義である。ここが、きわめて大事なところだ。アメリカの民主主義は、軍隊をもち戦争をできる民主主義である。日本以外の民主主義は、みなそうだ。ところが、われわれは軍隊のない民主主義をつくらうとした。そのとき、平和主義が日本の民主主義に筋金を入れた。このことは、平和主義の問題だけでなく、民主主義にとっても、日本の独自性を誇つていいところだ。

もう一つ大事なことは、平和主義が戦後の倫理を形成したことである。キリスト教社会と違って倫理的基盤が弱いとはいえ、戦後の日本のモラル・バックボーンをつくったのは、まぎれもなく平和主義である。あの戦争のことを言いだすと、みな肅然とした。ごまかすにしろ何にしろ、どこかにあの戦争があつて、そこにモラルの出発点みたいなものがあつた。しかし、戦後五〇年の過程のなかで、これによつて支えられていたものが侵食され崩壊していつて、戦後モラルの政治的バックボーンだった社会党まで転向してしまふ。それがいまの状況で、非常に重大だと思ふ。今度の転向で、社会党は平和主義と民主主義を捨てたし、さらにモラル・バックボーンまで捨てたという気がする。

日本の民主主義は、あの戦争はひどかつたということから出発した、体現民主主義である。だからこそ、あれだけ広がつて、平和憲法を支えた。しかし、体現民主主義にはそれゆえの脆さもある。体が薄れていくと、どんどん消えていく。経済の繁栄がきて、これが民主主義を支えていた平和主義にとつて代わり、民主主義は市場経済の自由を守るものだといふふうになつてしまつた。平和主義がどつかへ行つてしまつて、世界中で市場経済の自由と民主主義が結びついてしまつた。これに、どう対応するのか。このことを問われているのは、日本だけではない。

日本人があゝの戦争での被害体験ばかりに寄りかかつて、加害者意識が少なかつたというのは、そのとおりだ。ベトナム反戦運動のなかで、私は被害者はそのままで加害者になると主張した。被害者であるにもかかわらず加害者になるのではない、まさに被害者であるゆゑに加害者になる。私たちは

自らの行為によってこの「被害者⇨加害者」の関係から自分を切り離さないかぎり、被害者でありながら加害者になると主張した。

しかし、こうした「被害者⇨加害者」の関係からはみ出た絶対被害者、絶対被害者が存在するとも論じた。たとえば、ヒトラーは絶対被害者だったのではないか。天皇もまた同じだ。しかし、彼らだけではない、「従軍慰安婦」を買った兵士は、そのときただの兵士でありながら、慰安婦に対して絶対被害者の立場に立っていったといつてよいだろう。そして、そのとき、慰安婦は絶対被害者の立場に立つ。朝鮮人「従軍慰安婦」の問題はきわめて重要で、被害者の問題のみならず、加害者の側でも問題を突きつめる必要がある。こういうことをわれわれはやったんだ、絶対被害者だったんだということ、思想的な突きつめのなかで論じるべきだと思う。

「殺し焼き奪う」をやつて「殺され焼かれ奪われ」を体験した歴史が、体現平和主義の基本だ。思想的にも体現的にも、直観的に把握してあらゆる戦争は悪い。われわれの側からみて、連合軍のやつた戦争が正義の戦争といえるだろうか。われわれが南京虐殺をやつたように、彼らはヒロシマ・ナガサキを、無差別爆撃をやつたのだと同じ視点で突きつめる必要がある。そうすることによって初めて、戦争に正義の戦争はない、どんな大義名分があろうと、やりだしたら目茶苦茶だということを、思想的に深く把握できる。連合軍を免責してはならない。あらゆる戦争は悪であると突きつめ、総体として戦争を否定する。そこまでの必要があると思う。

日本の平和運動がいまガタガタになってきたのは、ひとつには軍隊の問題を突きつめていなかったからだ。ついこのあいだまで、われわれの市民感覚のなかでは、軍隊は自分の外の世界の存在だった。軍隊というとすぐ出てくる帝国主義の問題、皇軍、中国を侵略した軍隊、あるいは『真空地帯』が描く「ぶつ叩く軍隊」、これら全部が自分の世界の外にあつたし、自衛隊もそうであつた。

しかし、他の国々では、軍隊は市民社会のなかに、自らのなかにある。民主主義国家の軍隊としてはこれが当然の姿なのだが、日本ではこの市民社会の軍隊という観念がゼロに等しい。これは、われわれの重大な盲点だ。この観念を理解するには、古代民主主義国家アテナイをモデルにとるのが簡単だ。アテナイにとって最大の問題は、外敵が攻めてきたらどうするかということだったが、市民社会なのだから、市民自らが守らなくてはならない。ということとは、槍をとつて戦うことが、市民の権利であり、義務でもある。戦う市民、それがアテナイの軍隊であつた。この市民社会の軍隊の基本的性格は近世の軍隊にも受け継がれる一方、キリスト教の観念が加わつて、市民はミリタリー・サービス（これを「兵役」とするのは誤訳である。本来の意味は軍事的奉仕活動）の形で、市民社会に奉仕するようになった。サービス＝奉仕というのはギブ・アンド・テイクではなく一方的供与。市民社会は市民自らのサービスによつてはじめて成り立つから、外敵がせめて来るという大事な場面では、市民がそれぞれにミリタリー・サービスをやる。これを提供しない人は、非市民、非国民であつて、市民社会の一員とは認められなくなる。このような軍隊の観念は、西洋社会ではいまにいたるまでずっとあると思う。ただ近年になつて、ミリタリー・サービスを拒否する権利が認められるようになった。良心的「兵役」拒否の制度である。この人たちは何をするかというと、シビル・サービス（市民的奉仕活動）

をする。良心的「兵役」拒否の観念は、ファシズムを体験した国々も含めた西洋社会が、一切の戦争を拒否するという平和主義を認め、シビル・サービスとひきかえに非市民、非国民とならない、という原理を組み立てた。これは、大事だと思う。ついでにいうと、日本の英語の字引のどれをひいても、ここに述べた意味での「シビル・サービス」の訳を書いていない。ということは、ドイツでもイタリアでもあたり前のこの観念が、われわれには無いということである。

そこへ最近自衛隊が合憲と認知され、軍隊が市民社会のなかへ、われわれ市民のなかへ入って来た。市民社会の軍隊は、基本的には全部徴兵制である。徴兵制がないというのは、今は平和すぎていらないうという偶然の理由からで、根本的原理的には徴兵制に行き着く。ドイツも徴兵制だし、イタリアでもそうだが、同時に良心的「兵役」拒否とシビル・サービスを認めている。日本では左翼にいたるまで、改憲をして軍隊をもつことを完全に合憲にしてもまさか徴兵制なんかにはしないだろうと思っているが、私は日本も徴兵制に行きつくと思う。自衛隊を市民社会の軍隊と認めると仮定すれば、それが原理的に最もいい姿なのだ。さらに、国際貢献や国際協力という、いわば市民社会の国際版を問題にしなければならなくなった。

そうすると、根本的な問題として、はたして日本は軍隊をもつのか、また市民社会の軍隊を認めた国々の仲間に入っていくのか、という原理的な問題が出て来るはずだ。平和憲法の原理からして、日本は軍隊をもたない、軍隊をもつた国家の仲間に入っていく行かない。このことがもつと論議されるべきだったが、改憲に反対する側が十分対応しきれないまま、ズルズルと来てしまったのではないか。

先に述べたように、兆民以来の日本の平和主義というのは、市民社会の軍隊も認めていない。この原理を最も明確にしたのが、われわれの平和憲法である。憲法第九条はどう読んでも、絶対平和主義の立場に立っており、あらゆる軍備を拒否すると書いてある。ただ、その一つの欠陥は、外敵が攻めてきたらどうするかという大問題に、あらわには答えていないことだ。しかし、この問題に対する論理的な答えは、憲法の前文に書かれてある。前文には、二つのことが書いてある。第一は、「尊敬される国になろうじやないか」、第二に、「これから平和な国をつくらうじやないか」。

第一の点について言えば、憲法制定当時に日本が理想と考えたのは、永世中立国のスイスだった。第二次大戦中、ナチ・ドイツあるいは日本をやっつける「正義の戦争」に加わらなかったのは、スイスとスウェーデン、それにスペインとポルトガル。なかでも、スイスは純粹に永世中立国の立場から加わらなかった（スウェーデンもこれに近い）。しかし、このことに関して、スイスを論難した人はいなかったし、戦争末期にスイスとスウェーデンは国際的に重要な役割を果たした。ここでいちばん大事なことは、スイスが永世中立国として尊敬されていたことだ。だから、ナチ・ドイツも攻めなかったし、連合国側にも必要な存在だったのだ。このような、どこの国も攻めてこないような尊敬される国、そういう地位を日本は得ようじやないかということ、憲法前文は言っている。第二のポイントは、平和な世界をつくるために、日本は率先して働くから、他の国々も一緒にやろうじやないか、と注文をつけていることにある。他の国に注文をつけている憲法は、日本国憲法しかない。要するに、まず自分たちは尊敬される国になって、次に率先して戦争のない世界をつくるんだから、皆さん一緒にや

りましようと言っている。それによつて、だから平和憲法だ。

このような見事な論理構成をもつていながら、日本国憲法にとつての不幸は、出来上がったばかりで国際的発言力ゼロのときに、日本が東西の冷戦対決構造に巻き込まれたことだ。このなかで、残念なことには、日本は二つのことをやらされた。まず軍隊（警察予備隊）をつくつた。それから、日米安全保障条約によつて中立をやめた。このことによつて、理念的に素晴らしく、次元の高い憲法、世界に向かつて普遍的に開かれた憲法、つまり世界的な平和革命を志向する憲法が、タダの憲法になつてしまつた。そして同時に、世界的な憲法から一國平和主義の憲法になつてしまつて、そのままずっと今日まで来た。湾岸戦争のときに他の国々から、「おまえたち何だ、一國平和主義を決め込んでいいの」と非難を浴びたのも当然である。事実、そうなつていふのだから。

いま国連の安全保障理事会の理事国になるとかならないとかやつていふが、その際、自分たちの国がそれだけ世界的な影響力の大きな国になつていふ、という自覚が欠けていふと思う。日本が平和主義を捨てて、軍隊をもつのが当然だという方向へ向かえば、つまり日本のような世界第二の軍事力をもつ国がそつちにぐらひ傾斜すれば、世界は必然的に悪くなる。世界はいま、いい方向へいくか、悪い方へ向かうかの大事な分岐点に立つていふと思う。そのことを、われわれは余り自覚してないのではないか。他方、今こそ平和憲法を実現するときにきていふ、それをやれる国力がある、とも言える。このときにあつて、平和憲法を実現する、自衛隊縮小の方向へ邁進するといふ大方針を立て、まず国連（＝軍隊をもつ国の連合）から脱ける。それから、国連の非軍事部門（ユネスコなど）に留まつ

てそちらへ金を注ぎ込む、あるいはN G Oを推進するとか、いろいろなことができると思う。日本はそれだけ大きな国力をもっているし、またそうすることが世界に対する大きな責務ではないか。

二年間アメリカにいて気がついたが、アメリカでいま反戦平和運動を中心的にやっているのは、ヴェトナムから帰った兵士やC I AやF B Iを退役した人々だ。十年程前、イスラム・ファンダメンタリズムの攻撃を受け、ベイルートのアメリカ海兵隊司令部が吹っ飛ばされて、二〇〇人以上が犠牲になった。その生き残りの元司令官が、生き残りたちの集会で「私たちは、なにをしたのか。平和維持軍の名前で行ったが、平和などはどこにもなく、戦争のみがあつた。私たちがしたことは、戦争を拡大しただけだつた。銃口から平和は生まれない。したがって、ボスニアへの軍事介入にも反対だ」と演説をした。

私はアメリカのあちこちの集会で、平和主義を説いてきたが、そのとき反対して来るのは必ず日本人留学生である。小田さん、ソマリア放つておいていいんですか、ボスニアどうするんですか、他の国が血を流しているのに自衛隊送らないでいいですか、など。アメリカ人は、こんなことは言わない。考えてみるがいい。世界最強の軍隊、ゲリラ戦争を経験した軍隊が行つて平和が回復しないところへ、自衛隊が行つて何が解決するというのか。私がつとえていうのは、大人が大喧嘩して泥だらけになっているところへ、子供が一緒になつてバタバタしたら、余計泥だらけになつてしまふということだ。日本の本当の力や軍事力についての現実認識のなさ、それを私は感じる。

国連に協力することが目的なのではなく、平和を創りだすことが目的なのだ。民主主義のために人々がいるのではなく、人々のために民主主義がある。本末転倒はまちがつている。

(一九九四年)

(注)
雑誌『すぼる』に一九九九年二月号より、現在(二〇〇五年七月)も連載中。

つづきは製品版でお読みください。